音を利用した遊びとその玩具の提案

4番　大和田　恵美
28番　古山　美喜子

【背景と目的】

今回の研究のきっかけは「福祉」と「こども」に興味があったことから、障害を持つ子どもや障害を持たない子どもでも皆一緒に遊べるような遊びやおもちゃはないだろうかと考えたことです。そこで自分たちにとって各種メディアなどを介して比較的知識として理解していた視覚障害、聴覚障害を平行して調べていくことにした。情報の多さや検査内容の他、生後三年以内に発見できれば、治療できる可能性が高いということから、難聴という症状の早期発見を目的とした、早期発見のための音の玩具を提案しようとした。しかし、新生時期の脳波検査により、早期発見の問題が解決の方向に向っていることがわかった。

そこで、難聴の障害を持つ子どもの遊びの幅が広がる玩具ということに焦点を当て、一人で遊ぶのではなく二人で遊ぶということに着目した。障害を持つ、持たないに限らず、幼児期の子どもにとっての遊び相手というのは主に母親やその家族である。しかし、ここ数年頻発する幼児虐待といった問題をはじめ、母親自身が子どもとのコミュニケーションに多くの悩みや不安を抱いていることを知った。そこで本研究は、子どもとその母親や家族を対象とし、遊びを通してのコミュニケーションの機能を持つ玩具をデザインすることを目的とする。

【方法及び過程】

インターネットによる現状把握
↓
目的の具体化
↓
調査内容の検討
↓
玩具の現状調査
↓
育児・難聴に対する意識調査
↓
資料による調査
↓
問題提起
↓
コンセプト提起
↓
アイディア展開
↓
デザイン提案
↓
設計
↓
検討
↓
最終デザイン提案

【母親の意識調査】

○アンケート
楽器のおもちゃはいつぐらいから与えましたか？
これからの方はいつぐらいから与えたいと思いますか？

7ヵ月以前	234
8ヵ月～9ヵ月	108
10ヵ月～11ヵ月	91
1才0ヵ月～1才5ヵ月	147
1才6ヵ月～1才11ヵ月	57
2才0ヵ月～2才5ヵ月	34
2才6ヵ月～2才11ヵ月	11
3才以上	3
合計	685

（コンビ社アンケート調べ）

【母親へのインタビュー】
○おもちゃに対する母親の意見
・自然のものや木のあたたかみがあるものがいい
・安全性を配慮したものを好む
・子供が飽きないおもちゃが欲しい
○コミュニケーションがとれるおもちゃとは？
・双方向で楽しめるもの

【１歳児の成長過程及び玩具の現状】（協力：利根川先生）

○１歳前後の特徴
・目標に向かって行動する
・知能がひとりあるきを始める

○主な発達の特徴
・両手ではさみ込むようにもつ
・たくみに物が握れる
・立つようになる
・歩くようになる

○遊びの特徴
・自分で喜びながら物を投げる
・指先を使ってあそぶ（つまむ）
・投げた物を拾い上げまた投げる
・音を知覚して遊ぶ

○使用する玩具
・音を利用した玩具
・模擬遊び玩具
・体を使う玩具

【幼児向け玩具の一例】ボーネルンド社より

消防署　ウッディタイプ

ままごとセット（左：プラスチック製　右：木製）

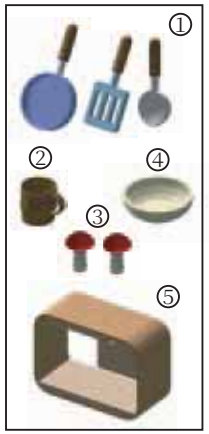
【コンセプト】
音のおもちゃを通じての親と子のコミュニケーション
ごっこ遊びは、モノや人を介して知性・情操・社会性などを子どもに伝え学ぶ、親子の対話

【デザイン案及び概要】

「音を利用した玩具」イメージ図

【対象】
１歳前後のお子さんとその両親、家族

【デザインコンセプト】
・角のないデザイン
・親子が一緒になって遊べる（対面式）
・自然素材として、木材を使用
・手触りの良い素材を仕様
・飾っておける
・音素材を使用



① ○ぐにゃぐにゃキッチンツール
発達との関連性：触感・繰り返し動作・ひっぱる
遊び方及び効用：繰り返し動作と指の複雑な動きによって感性の発達を促す

② ○録音コップ
発達との関連性：両手で握る・音を知覚して遊ぶ
遊び方及び効用：コップに向かって声を発し、録音機能を持たせることで自分の声や家族の声に反応し、音に対する興味と好奇心を育む

③ ○ソルト&ペッパー
発達との関連性：腕の上下運動・つまむ
遊び方及び効用：きのこをつまみ、上下に振ることで筋力の発達を促す

④ ○サウンドプレート
発達との関連性：模擬遊び（ごっこ遊び）・つかむ
遊び方及び効用：音の興味を持ち始める時期だからこそ、お皿のメロディで音を楽しみ、お母さんとのおままごとを通してコミュニケーションの幅を広げる

⑤ ○収納上手（250×350×150）
発達との関連性：模擬遊び（ごっこ遊び）
遊び方及び効用：対面式の収納上手でおままごとをしながら自我の芽生えを促す

【考察】

幼児期の子どもというのは一生を通じて最も多くのことを学習し、それを吸収する能力に特化した時期と言われている。現在の幼児期の子どもを持つ母親の、子どもに対する教育意識は非常に高く、脳の発達を促す知育玩具や知育教材というものが育児商品市場に多く出回っていることが分かった。幼児期の玩具の調査結果から、最近の幼児向け玩具の特徴として、日々子育てに奮闘する母親の意見を実際に取り入れた玩具を売り出すなど、キャラクターを用いた趣向的な商品ではなく現場の声を活かし、機能や素材に重点を置いた質の高さを問う商品が増えている傾向にあることも分かった。

そこで、今回の幼児期のこどものための玩具を提案するにあたり、脳や指先を動かす知育玩具を参考にしつつも、当初検討していた難聴発見のための音に関する研究データと母親の抱える「子どもとのコミュニケーションに対する不安」という意見とを照らし合わせ、幼児期の子どもの成長過程や住居環境に配慮した玩具をデザインしてきた。私たちの提案する音の玩具と、従来の市販されている知育玩具及び音の玩具との差別化には非常に苦労したが、玩具に質の高さを求められている今、自然の素材に重点を置いた親と子の双方向の遊び道具を作れたと思う。しかし、自然素材の暖かみが音素材によって希薄になってしまうという問題もあるため、今後の課題として検討していきたいと思う。